

青春スクロール

母校群像記

saitama@asahi.com

未知と刺激 本の世界に浸ったあの頃

熊谷女子高校（以下、熊女）図書館の一角に、「熊女コーナー」がある。そこには、熊女OGが手がけた作品が並べられている。

ひととき目を引くのが芥川賞作家青山七恵（39、2001年卒）のコーナーだ。熊女時代は図書委員も務めており、図書館との縁は深い。「外国にაცოგれが読んできた」。その中で手にとったフラソワーズ・サガンの「悲しみよこんにちは」との出会いが、作家への道へとつながっていく。

クラブはギターマンドリン部で、フルートを担当。演奏会や大会前の練習の厳しさは今でも思い



「窓の灯（文藝賞）や「かけら」（川端康成文学賞）なども受賞した青山。他に「繭」「わたしの彼氏」「みがわり」など



県立熊谷女子高校⑧

出す。寒い集会室での追い込み練習は「温風器の温かさが届かなくてけっこうきつかった」。2007年に「ひとり日和」で芥川賞を受賞した時、部の仲間がサプライズパーティーを開いてくれたことも母校への思いを一層強いものにしてくれた。

もう一つ、印象深いのが「体育の授業前にやる熊女体操。どういう動きか忘れたけどなぜか気になる」。熊女によると「自校体操」というもので、今もある。体を柔軟にするオリジナル体操で、伝統校ならではの習わしだろう。

「熊女コーナー」には歌集「窓を打つ蝶」もある。その作者、歌



図書館にある「熊女コーナー」。青山の「RELAX & OPENMIND」のサインも掲げられている

人の王紅花（73、1967年卒）

は弁論部に入部し、部員は生徒会の役員と重なっていたので生徒会も兼務した。「先輩がいい人だったのだから在籍したが自然と足が遠のいた」。中学生の時に石川啄木の歌集を読んだりノートに短歌などを書き留めたりしていたが、熊女時代は「冬眠状態」だった。「まずはいい大学に入りたくてガリ勉の毎日だった」。後輩のために、年3回出す歌集「夏暦」を毎回熊女に贈呈している。

東京・調布で俳句短歌、詩集の出版社「ふらんす堂」を営んでいる山岡喜美子（71、69年卒）は



王が手にしている最新歌集「窓を打つ蝶」は亡夫・松平修文に捧げた作品集。歌人の松平は青梅市立美術館副館長も務めた

水泳部に入部したが「あまりの厳しさに1日でやめた」。それから本と親しむ日々を送る。家では、熊谷高校に通っていた兄には

日本の文学全集、自分には世界の文学全集を買ってもらい、ドストエフスキーやサマセット・モーム、ロマン・ロランなどを読んだ。「本の世界にすべてがあった」と振り返る。当時、図書館は木造だった。「天井が高く、ちょっとかびくさい匂いもしいい図書館だった」

時代が変わり、建物が新しくなっても、熊女の図書館は今も未知と刺激に満ちた世界を提供し続けている。毎年選ばれる50人近い図書委員が「読書班」「視聴覚班」など4班に分かれて、図書館司書とともに積極的に図書活動を行っている。

敬称略



山岡の丁寧な仕事ぶりは作家の間でも定評がある。若い俳人を育てる「田中裕明賞」も創設している